

(シムリアップ)

バンコク経由でシムリアップのアンコール国際空港に着いたのは午後 10 時過ぎで、ホテルまでの夜の繁華街は欧米人、中国人など外国人ツーリストでごった返していた。アンコールワット、トムのお蔭である。ビジネスチャンスを求め、開店したカンボディア人や外国人経営の店が観光客で賑わいカンボジア経済に貢献している。

宿泊したホテルは繁華街から少し入った簡素なホテルで、湯は出ないがシャワーもあり良い意味の期待外れだった。ロビーには仏像が置かれている。各家庭の玄関先にも仏像が設置されていたりする。黄色の衣を纏った僧が托鉢している光景もよく目にする。このような敬虔な仏教国で、何故ポルポト時代の狂気の殺戮が行われたのか理解できない。

(バットタン)

翌日からは2台の4駆に分乗してバットタンまで移動。運転手は少し話せるが、カンボジア事情を聞けるほどの英語力がなかったのは残念だった。

4車線の歩道のない道路を走り続ける。点在する小さい町を通り過ぎ、郊外には刈取りが終わった農閑期ののどかな田園が続く。気温は6月はじめといった感じだが乾季なのでさわやかである。鉄道とか定期バスはほとんどなく、住民の交通機関はもっぱら車かバイクである。バイクは大人だけでなく子供も運転している。中には4人乗りもある。バイクを追い抜くたびに肝を冷やす。後聞では、保険もなく死亡事故の補償は数十万円だとか。あの交通密度だから事故は深刻な問題だろうがキャンペーンもやってない。行政、社会システムが未整備で何もかもがこれからという気がする。

(ホームランド)

バットタンでははじめに孤児院ホームランドを訪れた。人身売買の被害やストリートチルドレン、エイズ孤児など親と生活できない子供たちのための保護施設で、数人の子供達にあったが、意外と明るい。施設は様々な援助もあり建物も多く機能的に配置されていて、結構広い。奨学金制度を利用し大学で学び立派になった卒業生もいる。

内戦終結から時間も経ち、経済の向上とともに孤児の態様も変わりつつある。近年は入所者が減り、新たに英語塾をしたり、日本からの中古服の販売店を開いたりしている。人道的崇高な理念で取り組んできただけに今後も支援していきたいが、そのためにも将来を見通した事業の在り方を考慮していく必要があると感じた。

(ラチャナ ハンディクラフト)

女性の自立を支える施設ラチャナを訪れたのは午後遅い時間だったが数人の女性が機織りやバッグをつくる作業をしていた。暴力被害にあった等の婦人の自立のため、裁縫などの技術を身につけさせる目的から始めた施設である。

近年はイタリアからの引き合いもあるなど売り上げも伸びているとの説明もあった。現作業、訓練

場所や宿泊部屋は狭く暗い。今後さらに売り上げ伸ばす中で環境改善をはかることが求められる。また訓練を受けたい女性の掘り出しも課題となる。

さらに取引を増やすためにはデザインも考えなければならない。そういった面からの支援も考えられると感じた。

（オー・トウク・ビル小学校）

泥ほこり舞うでこぼこ道を幹線から10kmほど行くと小学校に着く。沿道には収穫を終えたキャッサバ畑が続く。小学生地元住民など大勢の人の歓迎を受け、州副知事、教育局次長、郡長など出席のもと小学校校舎の引き渡し式が盛大に開催された。日本側からの出席はセカンドハンドとコーディネーターのSVAや美容関係者である。高官の出席は我々の支援の重要性を意味する。

旧教室に比べると規模も大きい。今後、この校舎が十分活用され、良い教育が施されることを願う。副知事の祝辞の中で学生に対し、決して麻薬に手を出してはならないという言葉がでたのには驚いた。タイの国境に近く安易に手に入りやすいのだろう。親なども使用するので抵抗感がないのかもしれない。悲しい現実である。

学校整備は財政状況の厳しいこの国ではまだまだ難しい。教育は国の発展の礎であるとともに子供たちが貧困から脱する手段でもある。ここにまだ援助の余地がある気がする。

（カンボジアのこれから）

カンボジア人は大雑把と言われているが教育とともに変化していくに違いない。食堂や雑貨屋では女性が切り回している場面を多く目にする。カンボジアの女性は働き者で、地域経済を支える主役である。シェムリアップやバットタン周辺しか見てないが、都市部と農村部の経済格差は拡がりつつある。カンボジア経済はテイクオフした状況で成長率は高いがパイは小さい。財政収入も十分でないため、援助頼みでインフラもこれからというところだ。

経済データを見るとGDPのうち農業が占める割合は30%となっている。対日貿易は1000億円余で衣類、履物、バッグといった軽工業品が多い。「縫製の国」といわれるのがよく分かる。産業構造の高度化はこれからだ。平均年齢は24歳で労働力は豊富だが更なる発展のためには教育環境の整備が求められる。

車窓からみると民家の周辺にはプラスチックやビニールなどのごみが放りっぱなしで、下水を家の周りに流すなど環境、衛生状況が劣悪である。日本も下水道、廃棄物回収システムが整備されるまでには大変な時間を要したことを考えれば大きな課題である。

戦後の経済状況から日本の成長を見てきた私には他人事とは思えない同胞意識のようなシンパシーを感じている。

今回の研修旅行はカンボジアの一端を見たに過ぎないが、これを契機にカンボジアについてもっと学んでみたいと思う次第である。「ソンベア」

1 道路沿いの竹筒入りおこわ(クラロン)の屋台。懐かしい味、美味。



2 教室の生徒 (オートウクビル小学校)

